

# 『菊と刀』（ルース・ベネディクト）への一試論

## “Giri and Ninjō — the World of Nippon —”

武田光史

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、大太平洋戦争当時における「戦時情報局」の指示による日本研究の成果として、1946年、『菊と刀』を著した。その中でベネディクトは、欧米のキリスト教文化圏での罪の文化（Guilt Culture）に対して、日本でのそれを恥の文化（Shame Culture）として位置づけたのである。

キリスト教での罪の意識とは、言うまでもなく、人類の始祖アダムとイヴが神に背いて犯した罪（原罪）により、その子孫である人類はすべて神に対して罪人であるという意識である。従ってまた、罪人であるが故に、神に対して、神との関係において、神の教えに反するような悪い行ないはせず善行をのみ努めようとする内発的な行為意識でもある。それに対して恥の意識とは、「みんなの前で恥を掻かされた！」とか「きさま、恥を知れ恥を！」という表現に見受けられるように、良くも悪くもそれは他人に対してとか周囲の者に対してとかの、あくまで対人間関係での外発的な行為意識であり、そこには神は介在していないのである。従って人が見ていないとか誰にも知られないとなるとすぐにコンコンと悪い事をしだすまた良い事をするにしても人並みでそこそこの良い事しか出来ない（大それた悪事はどうしてもバレるので出来ないし、ずば抜けた善行は他人に足を引っぱられたり妬まれるので出来ない）というのが日本人の性癖となっているのである。<sup>(註1)</sup>つまり言い換えれば、キリスト教文化圏での国々は絶対神と個々人との契約による個人社会を形成し、日本は仏教という宗教はありながらも絶対神の存在しない個人と個人の結び付きによる人間関係的集団社会を形成することとなる。<sup>(註2)</sup>

絶対神の存在しない人間と人間との関係のみを根底にしたこの集団社会の構造とは、どのようなものとなっているのであろうか？ つまりそれは、皆がめいめいに好き勝手なことを言い好き勝手な行動をとっていたのではまとまるものもまとまらず個人と個人との結び付き・関係は成立しなくなり、従って「気がきかん奴じゃのう、ちったあ気をきかせ！」というように相手の気持を察するとか自分の気持をわかってもらう「以心伝心」ということが第一条件の社会となる。<sup>(註3)</sup>そこではまた理屈っぽい言葉は不必要（「ペラペラとまあ理屈ばあ言うな、誰も聞きよいうりゃあせんぞ！」）となり、人間同志の気持の通じ合いによって成り立つ家族的情愛の社会つまり人情の社会であり、この人情に外れないように努めることが義理であり、日本の社会とは人情とそれに伴う義理によって人間相互が結合しているところの俗に言う義理と人情の社会なのである。<sup>(註4)</sup>つまり親子の関係であり兄弟の関係であるような社会ということは、ヨコの結び付きよりもタテの結び付きの方がより強力となり、親分・子分の間柄とか兄弟の契りを結ぶというようなタテ型社会とならざるをえない。<sup>(註5)</sup>社長→重役→部長→課長→平社員（校長→教頭→課長→主任→平教員にたとえてもよい）という上からの家族的タテ型の構造を形成しているのが日本の社会なのである。

再度くりかえすことになるが、タテ型の義理と人情の社会とは言いたい事があっても相手の気分を害してまでズケズケとはものの言えない言ってはならない社会となる以上、そこではま

た本心の言えないタテマエだけの社会、別の言葉で言えばオモテの社会となり、ホンネの言えるのは——つまり心を割って上役に相談が出来、またその上役の悪口が言えウッポンをはらすことの出来るのは——仕事の場を離れての所・酒の場というウラの社会においてであり、<sup>(註6)</sup>かくして日本の社会にはオモテとウラがあり、日本人の心の底にはタテマエとホンネがあるという二重構造を呈することとなる。

日頃の行動においては上役の気分を害さないように何を言いつけられても「はい、はい」と言われたままの行動をとっていけばよく、また誰に対しても対応する時にはニコニコと笑顔で接していれば波風が立つこともなく、万事これスムーズに事がはこぶのである。<sup>(註7)</sup>「日本人はみんな親子・兄弟、この世の中はモテつモタレつ、まあまあ仲良くやろうじゃないか」というように人間関係を最も大切にし重要視するのが日本の社会の特徴であるが、これはまた他方では欧米のような厳しい個人的能力主義の社会とは対照的に「少々のこたあマーマーええじゃないか、大目に見てやろうや、ノ」というお互いに許し許され見て見ぬ振りをして馴れ合いを生む**甘えの社会**ともなる。

上役は部下を思い、部下は上役の期待にたがえぬよう、ともに会社のために一生懸命に働く。これが日本株式会社（この中に住友グループがあり三菱グループがあり…… さらにそれらの系列下にあたまの中小企業群がある）の姿であり、<sup>(註8)</sup>上下の人間関係をスムーズでまとまりのあるものにするためには年功序列式、愛社精神を養わない安心して業務に励んでもらうためには終身雇用制、それらの結果としては必然的に労使協調路線とあいなるのである。

しかしこの日本株式会社の中であって出来ることなら生涯平社員のままではいるよりは課長に、課長よりは部長にと願い望むことは人のサガというものであり、この願望を満たしさらに上下の人間関係が円満であるためには東京大学を頂点とする**学歴主義**を採り入れる必要があったのである。誰でもが入学試験に合格さえすれば一流大学に入学することが出来、また一流大学を卒業していれば誰でもが地位も名誉も名声も金も手に入れることの出来るトップの座にすわることの可能な、日本の社会は階級の固定していない**庶民社会**なのである。<sup>(註9)</sup>かくして熾烈な人間相互の競争とか自己との戦いは高校卒業・大学入試までで終止符を打ち、<sup>(註10)</sup>あとはタテ社会のルートに乗かって義理と人情の人生を天然資源もなく国土もない輸出立国としての日本株式会社のために頑張ればよいのである。

日本の社会はそれではなぜ、これまでに述べてきたような現象を呈せざるをえないのか。しかもこれらの現象はあくまですべて結果であり、それではこれらの結果を引き起こす元となる原因とは一体何なのであろうか。その原因とは、一言で言ってしまえば、日本は四方を海に囲まれた山がちで人口過密な**島国**であり、また古来よりこのかた他国によって**侵略**を受けたことがなく、なおかつほんの少数の例外を除いて**単一民族**であり、一年は**四季**という季節によってはっきりと区切られているという厳然たる事実に戻ると言ってよかろう。

島国であるということは他国との摩擦・対立とか従ってまた自国の防衛とかにそれほど気をつかう必要がなく、しかも長い鎖国という時代も加わって孤立した状態にあり、国内だけに目を向けていけばよかった。また島国であることにより、他国から戦め込まれたことは1274年及び81年の蒙古襲来を除いてなく（なお大太平洋戦争では原爆まで落とされ敗戦・降伏はしたが侵略までされた訳ではなく）、何物を受け入れるにしても海洋という防波堤によりワン・クッション置いて日本に合致するように受け入れることが出来、国内での混迷など生じることがなかったのである。<sup>(註11)</sup>島国であり侵略もないその上に単一民族であるという大きな要因があるが故に、お互いに気心も知れ多くの言葉を必要としないツーカーの仲となるのは当然の帰結であった。

以上の三大要因に加うるに日本の国土には四季があるということは、俳句とか短歌の世界が象徴しているように日本人の精神構造は季節の変化と密着したものとなっており17文字とか31文字だけで全てが悟り合えるのであり、また『菊と刀』という表題が暗示しているように一方では繊細でよく気がつき親切でやさしく……… 他方では鋭く逞しく勇敢で荒々しく野蛮で………<sup>(註12)</sup> という相反する性情を有する国民性ともなっているのである。

「日本人とはいったい何なのか？」についてまとめてみた訳であるが、それではさて、いきなり唐突に「なぜ日本人論なのか？」についても今少し述べてみたい。その理由はまず第一に「日本人として日本に生まれ日本で生きながら、我が国日本を知らずして何ぞ外国をや！」<sup>(註13)</sup> ということに今さらながらハタと気がついたが故の「日本人論」なのである。日本は古代においては中国大陸より、中世においてはとりわけポルトガルとかオランダより、そして明治以後においては殖産興業と富国強兵のもとに欧米よりの先進科学技術を盗むがごとく取り入れていけばよかったのであるが、今やすでに経済大国と言われ工業製品を世界中に氾濫させるまでに至っている。その一方ではこの日本と日本人——欧米から見ればとりわけ異質で特殊ではあるが——を真に理解してもらうための文化面での輸出と人的交流は増加しつつはあるがゼロに等しいという日本での、一日本人としての反省を込めての「日本人論」なのでもある。

現代は「国際化の時代」とはよく耳にする言葉であるが、それでは具体的にはどのようにすることなのかについてはあまり聞いたこともなく、とにかく桃色人（一般には白人と言われていたが、いろいろな意味において桃色人と呼ぶのが妥当のように思われる）と見れば日本という独立国にありながらペコペコとへりくだりすぐに英語で話しかけたがり、<sup>(註14)</sup> その一方では同じアジアの黄色人に対しては冷酷で蔑視的な態度をとる傾向があり、<sup>(註15)</sup> また幼ない時より遠足とか修学旅行で習性づけられているように「オー、ノーキョー！」よろしくなんらの文化的交流はするでもなく恥の文化の人間でありながら旅の恥はかき捨てとばかりに恥も外聞もなく団体を組んでゾロゾロと外国の街々を歩き回り、おまけに成金趣味よろしく女と土産物だけを買ってあさるのが「国際化の時代」での日本人のなすべき役割でないことは確かであるのだが?! 戦前の軍事大国から戦後の経済大国へ、そしてこれからの日本は長い歴史と伝統に裏打ちされた文化大国としての道を押進めて行くべきであり、聖徳太子の時代より「和をもって尊しとなす」とする日本人は国内においてだけでなくさらに地球的規模での共存共栄・相互理解という人間関係社会の確立を強力に進めて行くことをこそ「国際化の時代」での出発点となすべきである。そしてそれが出来るのは、いや、やるべきであるのは「大学というかなりヒマ(?)な所に籍を置き、とりわけ外国語を手段としての研究に携わっている教員からではないか?!」ということを訴えて、この稿の締めくくりとしたい。

(なお、この稿は加筆修正して英訳のうえ、数年後、ロンドンにて公表の予定であり、もし日本人の特質およびそれを形成する要因として大きく欠落している部分があれば、大方の諸賢よりの御教示をいただけますれば幸いです。)

## 【註 釈】

- (1) さらに具体的には、キリスト教の国々では「神に誓って……」であるのに対して日本では「(自分の)良心に誓って……」であり、この良心ほどまた信用のおけないものではなく、スキあらばすぐに万引(ロンドンの百貨店にまで行って万引をやって捕まった日本女性もある)とか汽車への不正乗車をやるのである。なおロンドンの赤いダブルデッカー(二階建てバス)では乗ってから行き先か料金を告げてキップを買って

- も降りる時に渡す必要はないのである。さて、これを日本でやったらどうなるであろうか？
- (2) たとえば日本の神道における天照大神も人間であり、現人神と戦前に言われたのは現在の天皇であり、また仏教における仏とは人間がいずれは行き着けるであろう究極の姿であり、いずれも絶対神などではない。さらにキリスト教においては人の世を作ったのは神であるが、日本においては「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒両隣りにちらちらする唯の人である。」(夏目漱石「草枕」)となるのである。
  - (3) ここに一つのエピソードがある。ある外国の要人が日本の高度成長の秘訣を知りたくて度々日本にやって来たのだが、どうもよくわからない。そしてある会社を訪問してからの帰りがけ、あいにく一万円札しか持ち合わせがなく若い事務員に小さくしてくれるよう頼み、そして持って来てくれた封筒を開いてみると千円札が8枚、五百円札が2枚、百円硬貨が10枚入っており、おもわず「これだ！」と叫んだとのことである。
  - (4) たとえば「義理ある仲」とは親子や兄弟姉妹のような情によって結ばれている間柄の事である(『広辞苑』を参考)。さらにその典型的な例として御存知の「忠臣蔵」があり、主君と家臣とはかたい情で結ばれた間柄にあって、主君亡きあとは仇討ちによって義理をはたすという精神は、現代の我々日本人の心のうちにも永々と脈打っているのである。
  - (5) 親子・兄弟といえどもヨコの結び付きが可能ではあるが、特に江戸時代よりの儒教の教え(君主とか目上の者に対しては忠、親に対しては孝)により下の者は上の者に頭があがらないという上の力の非常に強いタテ型社会となったのである。
  - (6) 従って経済大国日本を支えている男性のためのパー・キャバレー・料亭(政治家用の赤坂の料亭は特に有名)のたぐいは全国津々浦々にあり、またウラ社会のために計上される免税となっている社交費は毎年ばく大な金額なのである。政治の世界においてはをはじめ、たいていの決定事項はこのウラ社会ですでに根回しが出来ており、公式の会議の場(オモテ社会)では「ハイ、シャンシャン」とあいなるのである。
  - (7) こういった日本人の態度はすでに習性と化しているらしく、たとえば外人に話しかけられた時には分っていないが「はい、はい」であり、また常にニコニコとして接しこれを称してジャパニーズ・スマイルといわれているのは御存知の通りである。
  - (8) これらのグループはお互いに競合・対立の関係にあり、従って義理と人情も及ばずむしろ冷酷・非情となりうるのである。また初対面の挨拶においては欧米では“What's your job?”であるのに対して日本では「どちらにお勤めですか？」つまりいきなり職業を聞くのは失礼であるという気持と同時に日本株式会社などのグループに属しているかがまず第一の関心事ともなるのである。
  - (9) 庶民社会ということに関しては、たとえば身分制度の固定していた江戸時代においてさえヨーロッパよりもより流動的であったことを付記しておきたい。
  - (10) どの学校を出たかという最終学歴によってその後の人生の大半が決まってしまうということは、誰も彼もが高校は普通科へ大学は一流有名大学へという過当競争とその反対の落ち零れを生む結果となり、またこれはすでに社会の大きな問題となっているのであるが抜本的な解決策が見い出されていないという実情にある。なお日本の教育は個性を育てない画一的なマスプロ教育が特徴であり、ただ？学校卒業というレッテルだけによってこのタテ社会での位置付けが大きく運命づけられているのである。
  - (11) とは言え、現実を直視してみると、敗戦・降伏でのアメリカによる性急な押しつけとその後の政策変更により平和憲法は空洞化し民主主義も根づいているとは言えず、現在はむしろ戦後の新勢力の後退と戦前の旧勢力の反動的台頭という混乱の時代であるとも言えよう。
  - (12) 日本人は常日頃は口数も少なくニコニコとしているが、いったんやりだすと行け進めで何をやりだすか分らんという二重人格の国民であるとも言え、これは前に述べたオモテとウラ、タテマエとホンネに相通じる所があることを確認しておきたい。いや、四季のおりおりの変化に合わせて喜怒哀楽のはげしい四重性格の国民と言ってもよからう。
  - (13) こういった考えと関連して、「自分の文学を求めずまた持たずして単なる受け売りで形だけの外国文学研究など、真の文学研究とは言えず生きたものともならないのではないか？」という疑念をも提示しておきたい。
  - (14) 「日本である以上毅然として日本語で対応すべきである、いや日本語が話せないのだから英語で対応しなくてはならないが親切、いやいやその場その時に応じて使われればよい」といろいろな意見があるのは当然であるが、はっきりと言える事は桃色であろうが褐色であろうが卑下することも尊大ぶることもなく同じ人間として自然に接することが出来るようになるべきであろう。
  - (15) その典型的な例として朝日新聞、1月5日付「声」欄からの一部を引用させていただく。「私の友人でタイ女性と結婚した人がいます。誠実かつ堅実な一方、行動的かつ情熱的な国際派で、趣味のカメラを持ち外

国旅行へよく行くうち、知り合ったのですが、彼の会社の同僚の何人かは卑猥な、批判的な言動を直接ぶつけたと言います。他の人たちも、聞くことといえば“会話は何語?”“食事は何料理?”など、決まりきった好奇心でいどものだそうです。国際結婚は、言葉や習慣の違いから破局を迎える人もいと聞きますが、日本人の中の狭量と無知が、その人々に日本的画一性を押しつけているとすれば、反省すべきだと思います。」偏狭な島国根性しか持ち合わせていない日本人が相も変わらず多い中であって、真の意味での国際性を身につけた日本人が増えつつあることも、ここで指摘しておきたかったのである。